

---

**えっと、何だっけ。足が無くて両手でテケテケ動く奴だよ。**

悲劇のM

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

えつと、何だっけ。足が無くて両手でテケテケ動く奴だよ。

### 【著者名】

ZZマーク

悲劇のM

### 【あらすじ】

すいません、シンデ靈です。シンデレについては某所で『飽きた』だの『ワンパターン』だの指摘をいただいたので暫く自重します。

夜の学校というのは僕が知る場所の中では最も不気味である。特に靈感があるわけでも、幽霊の類が怖いわけでもないが、首筋を通る生暖かい風や静かな廊下に響く足音というのは何となく不気味だ。今僕がそんなところにいるのは、ただ生徒会の作業が長引いただけなのだが、先ほど見た時計は既に九時を示していたというのにはつきり覚えている。宿直の先生や警備員が警備室にいるだけで、他には誰もいない。こんな時間にまで生徒を残していくものなのかと疑問に思うが、文化祭の準備というのは自分のためでもあるから遅くまで残らせてもらっているのも好都合かもしれない。

お腹も減った。途中でファーストフード店に寄るのも金銭的に痛手なので、早いとこ家に帰つて夕飯にありつきたい。軽い鞄を背負いなおすと、靴箱までの道のりを急いだ。

一階の中央廊下にさしかかると、奇妙な音が聞こえた。ヒタヒタともテケテケとも取れる音。何かがこちらに向かって来るような音だが、何故だろう。足を使ってないというのが確信できた。

恐怖なんて無かつた。何だか人間が助けを求めているような気がした。

僕は自分から音のするほうへと歩いた。すると、そこには何ががいた。暗がりの中に目を凝らすと、女の子がうつ伏せに倒れていた。一瞬の出来事に驚きを隠せないが、その女の子に声をかけた。

「あの、君は？」

その女の子は顔をあげた。潤んだ瞳は大きく、真珠のようだつた。肌は白く、細い顔線を金色のツインテールが覆つている。年齢は僕と同じくらいだ。彼女に見覚えなどないが、うちの高校の制服を着ていた。

彼女は手を使って匍匐前進のように僕に迫つた。すると、さつきまで暗くて見えなかつたが、彼女には足が無かつた。足が無いのに

こんなところに一人でこれるはずがない。僕は彼女に殊を聞いた。

「君、車椅子はどうしたの？」

「あんなの必要ないわよ。それより、あたしに何か用事でも？」

彼女の言葉が終わらないうちに、僕は走っていた。自分の足音が

うるさいくらいに響く中、急いで保健室に向かつた。

幸い先生が閉め忘れたらしく、保健室には鍵がかかっていなかつた。

明かりをつける。室内の隅に、それがあつた。それを持つと、走つて彼女のあとへと戻つた。

「い、これ……」

荒ぶる呼吸を整えながら、保健室から持つてきた車椅子を置いた。彼女は不思議そうに車椅子と僕を交互に見つめた。

「あんた、何の真似よ」

「これ使ってよ」

「よ、余計なお世話よ。こんなあたしには必要ないんだから」「 unnecessary わけないよ。僕の祖母も足が不自由だったからわかるんだ。これ使われてない学校の物だし、気にせず使ってよ」

「そ、そんなに言つなら仕方ないわね。使ってあげるわ」

彼女は車椅子に座ろうとするが、手でやろりとしているのでかなり手間取っている。僕は黙つて彼女の腰を掴むと、車椅子に座らせた。今のが気に障つたのだろうか、彼女は頬を朱に染めながら僕に怒鳴つた。

「き、気安く触るな、バカ」

「「ごめん」ごめん。どう、乗り心地は？」

「全然だめよ。ゴワゴワするし、硬いし」

トイと顔を逸らす彼女に、僕は困ってしまった。

「そんなこと言つたつて、これしか無いんだから」

「あ、あんたの背中があるじゃない」

「どういふこと？」

「お、お……おんぶくらい出来るでしょ！」

彼女の顔は、茹で上がった蛸のよう赤かった。

「しょうがないな。さ、乗つて」

背負っていた鞄を手に提げ、車椅子の前で背中を丸めると、彼女は僕の背中にぴょんと飛び乗った。不思議と全く重くない。ここで彼女が幽霊だと確信するけど、そんなことどうでもいい。彼女の吐く息が首筋にあたつてくすぐったいのを堪えつつ、僕は靴箱がある玄関へと向かった。

「明日もここに来てもらつていい？」

背中越しに彼女が聞いてきた。

「別にいいけど

「ぜ、絶対だからね！」

すると、彼女は僕の背中でフツと消えてしまった。

彼女のことを気にしながらも、僕は一人で家路についた。

翌日、生徒会室で一人で文化祭の準備をやつてる途中、壁に掛かる時計が八時五十分を示していることに気付く。作業の手を止めて昨日の廊下に行くと、花柄の可愛いワンピースを着た彼女が退屈そうに片手にバスケットを持って待っていた。その中に入っていた二人分の弁当について聞くと、作りすぎただけで、けつして僕の為に作ったわけではないそうだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9566e/>

---

えっと、何だっけ。足が無くて両手でテケテケ動く奴だよ。

2010年12月14日19時05分発行